現場からの報告

おいしい漢文の味わい方

和田　朗

入試で国語の試験範囲から漢文を除く大学が増えつつある。また、本校の入学試験において、過去に漢文を出題したところ、中学校側から、「漢文は指導していないので出題しないでもらいたい」というクレームがついたこともあった（今でも出題しているが）。県立高校の入試でも、漢文は選択問題になってしまっているので、中学校で漢文を指導しない傾向は、今後も続いてしまうだろう。

そういう状態で入学してくる生徒たちに、一年生の一学期のわずかな期間（具体的には最初の定期考査までの約一ヶ月）で一通りの訓読法を教えるのは至難の業である。練習用のプリントを与え、まずは返り点通りに読み順を書かせるところから始め、書き下し文の作り方、再読文字の読み方、置き字の処理など、次々に指導するが、定着率は低い。本校では一年時の国語Ⅰに五単位を割り当てているが、現代文・古文各二単位、漢文一単位の配分なので、どうしても授業と授業との間があいてしまうのもその理由の一つであろう。また、同じ時期に古文の方でも基礎を教えるわけだが、こちらも漢文同様、出身中学校ごとに生徒の知識に差があって、時間をとられてしまう。結局駆け足で入門編を終わらせることになり、これが生徒の苦手意識を強くしているようだ。

本校には特別進学コース・進学コース・スポーツカルチャーコースという三つのコースがあり、私は進学コース（日本大学進学希望者中心だが他大学受験希望者も多い）に所属している。本コースの特徴は、生徒間の学力格差が大きいということである。このことは私がそれまでに体験したことがないものであった。以前私は難関校といわれる学校に勤務しており、ほとんどの生徒がほぼ同等の学力を有していたので、授業の進度についてはあまり気を配らなかった。しかし本校では二年生の段階で書き下し文も満足に作れない生徒と、十分な学力を有する生徒が同じクラスにいるのだった。そのため、基礎的な作業を中心とする授業を展開すると一方が退屈してしまい、読解中心の授業にしようとすれば一方がつまづいてしまう。この問題に関しては、勤務三年目となった現在でも有効な手だてが見つからない。今後の改善点であると思う。

以前の勤務校でも二年生を担当していた。文法的な説明は、大部分の生徒には一通り簡単に触れておけば十分であった。そのぶん教材の内容の指導に時間をかけることができたのだ。私はその学校が初めての勤務校だったので、現在の学校に勤めてしばらくの間は、生徒の学力にふさわしくない授業をしてしまった。多くの生徒には内容を深く説明するよりもまず、「きちんと訓読し、書き下し文を作る」ところから始めなくてはいけなかったのだ。

本校に来た年、私は二年生の理系クラスを担当していた。当然生徒たちの多くは、理数系の科目に関心が高く、文系科目に対してはどうしても興味を持てない者も多かった。中でも国語、特に古典は彼らにとっていわば「どうでもいい」科目になりがちであった。日本大学に進学するためのテストでは古典も出題されるので、彼らも取り組まざるを得ないという状況があったのではあるが、そのような中で授業を展開するのは難しい部分もあった。前任校でやっていたような授業ができないことに随分と悩み、自分の能力不足を嘆いたものだったが、途中から考え方が変わった。確かに以前のように文法的なことにこだわらず、直接内容に触れていく授業は展開できなくなったが、その代わりに漢文に関心の少ない生徒にどうやって理解させるか、いわば、嫌いな食べ物をいかに料理しておいしく食べさせるかということを工夫することに面白さを感じるようになったのである。

今年度、私は再び二年生の理系クラスを担当している。三学期になり、大学受験を意識する時期になったが、生徒たちにとって漢文が足かせにならないようにするため、さらに努力を続けたいと思っている。

（土浦日大高校）

「何のために生きているの」という質問にどう答えますか
―― 必要とされているわたしを感じさせるために ――

松本和博

「先生、何のために生きているの。」念願の教壇に立って二年目のある日、ふと、授業中に一人の中学生がこう質問してきた。正直言って困った。心の中では自分なりに答えがあったのだが、それをうまく言葉にできなかったのだ。その場では「それを見つけるためだと思うよ。」などと、お茶を濁してしまった気がするが、それから、この質問が頭の中をかけめぐる日々がつづいた。

わたしが教師を目指したのは、一言で言うと「一人ひとりが自分の生き方を見つけ、それを実現させる助けとなりたい」と思ったからである。しかし、目の前にある受験の現実や、うまく思いを伝えられない自分のもどかしさに本当に悩んでいた時期だけに、この素朴な質問は重かった。そんな自分に答えを考えるきっかけを与えてくれたのは国語表現の授業であった。

現在わたしは中学校と高校で講師をしている。高校は特別進学、普通進学、スポーツ文化進学の3コース制をとっており、国語表現はスポーツ文化進学コースの三年生のみが履修する。このコースは学年に一クラスのみで、ほとんどが体育会系の部に所属しており、男子三十名、女子十一名で構成されている。この子たちは二年連続（昨年度は古典Ⅰ）で担当することができた。

その年の授業が始まる前に、わたしは「全員が高校を卒業後に

何がやりたいかを見つけるようにしたい」と思った。それは、わたしが教師となってから、受けた相談で代表的なものが「やりたいことが見つからない。どうしよう。」というものと「どうして先生になったの」というものであったからである。このような、将来自分がどうやって生きていくのかという不安は高校生なら誰しもが持つのではないだろうか。だから、国語表現では多く書かせる中で自分を見つめ直し、進路選択のきっかけにすることを第一の目標にしたのである。

彼らには今年一年間、本当にたくさん文章や手紙を書いてもらった。はじめはまったく書けなかった生徒たちも、授業中に次々と次の原稿用紙を取りにくるようになった。そして、彼らの文章を読んでいて、ある共通点に気がついた。それは、自分が必要とされていると感じた、あるいは人から助けてもらった（他を必要と感じた）という内容の文章では、驚くほど自分を語っていることである。

例えば、部活でけがをして、異常なまでに疑い深くなってしまったとき、友人の一言が救いとなったこと。人と話すのが苦手だったが、バレー部の仲間との団結がきっかけとなって克服できたこと。学校をやめようかと思ったが、兄の一言により自分の気持ちを見つめ直し、今春立派に卒業できること。いじめられて自殺まで考えたが、両親の励ましで立ち直り、健康なだけでも素晴らしいと考えられるようになったこと。など、これらはどれも、自分が必要とされていると気づいた時のできごとである。友だち、親、兄弟、先生などに自分が助けられたことに対する彼らの筆力は読む者をぐいぐい引き込んでいった。それは、自分が一人で生きているのではないと実感できた瞬間の感動であり、その喜びの大きさは文体が途中で「だ・である体」から「です・ます体」に変わっていることや筆圧の強さからありありと伝わってきた。そして、その後、わたしの頭の中は「必要とされているわたしを感じさせるために、何ができるか」という問いでいっぱいになった。

それまでのわたしは生徒との一対一の対話の中で問題事を解決することに偏っていたように思える。授業でも生徒間の交流や、協力して問題を解決するという視点が欠けていたと反省した。すると、今まで思いつかなかったさまざまなアイデアがどんどん浮かんできた。もちろん、ケースバイケースなのだが、学校生活や部活や授業の中で「もっとこうすればよかった」と思うことがたくさんでてきたのである。

そして、わたしは今年の高校三年生との最後の授業で「どうぞ、必要とされる人になってください。そして、人から求められる喜びをかみしめて生きなさい」という言葉を贈った。これが今の自分の「何のために生きているの。」という質問の答えである。人は人から必要とされるために生きているのだと思う。自分が教師を目指したのも、今考え直すと「人から必要とされたい」という思いが強かったからだと言える。二月には、冒頭の質問をしてくれた中学生との最後の授業がある。その授業でもわたしは彼に対して自分なりの答えとして、このことを改めて伝えたい。そして、このようなことを考えさせてくれて心から「ありがとう」と言いたい。

生徒には自分の居場所を見つけるために学校で学び、より多くの人に必要とされるために社会に巣立ち、人のために誠実に尽くす喜びを知って生きてほしい。受験、就職難、不景気など、不安を感じずに生きることのできない現代、心を癒し、生きる力を与えてくれるのは「人から必要とされる喜び」であると思うからだ。

来年は私も教師生活四年目となる。これからは、がむしゃらに生徒とぶつかっていくだけでなく、一歩前に進み、生徒により多く、人から必要とされていると実感させる機会を与えていきたい。

（早稲田大学大学院教育学研究科科目等履修生・学習院中等科・狭山ヶ丘高校講師）

何か出来る

根岸一成

昨年四月、宮城県の中北部に位置する県立高校に赴任した。東北本線沿いの、人口七千人ほどの町にある本校は、普通科に家政科を併設する共学校である。生徒は地元出身者は少なく、周辺の市町村から通学している割合の方が高い。全校生徒数二百名、一学年三クラスで、計九クラスの小規模校でもある。毎年のように定員割れがつづいている上に、入学後も不登校となったり、退学していく生徒が跡を絶たない、いわゆる教育困難校である。

生徒たちの中には、義務教育期間を通じて「学校」という場所や「教師」という人間に対して不信感を抱いている者が多い。というより、そうした感情を募らせている生徒たちの集まる高校として本校はある。このような学校で「教える」ということはどういうことなのか。手探りの毎日だった。一口に触れ合いや愛情といっても、そこになにがしかの信頼関係がなければ何の意味も持たない。不信者の側に立つ私は如何にして信頼関係を築き得るのか、勉強嫌いの生徒にどのように学習意欲をかき立ててやれるのかなど、迷い多きスタートであった。

年度当初、三年生のクラスである出来事があった。始業のベルが鳴っても、教室にいるのは数名で、他十数名が行方不明の状態だった。内心の迷いを押さえながら、私は教室にいる者だけで授業を始めたのだった。しばらくすると行方不明だった生徒たちがおもむろに戻ってきた。「どこへ行っていたんだ」という問いかけには答えず、逆に、「どうして探しに来てくれなかったんだ」とがっかりした様子で問い返された。彼らは探し出されるために隠れていたのである。さながら鬼ごっこのようであるが、その訴えには、本校の、延いては困難校といわれる学校にいる生徒たちの声を象徴する問題がひそんでいるようで、考えさせられる出来事であった。

学校や教室という枠組みには収まらない生徒たちであっても、その存在を「発見」されたいと願っている。学校生活の中で誰からの注目も、発見すらされずに過ごしてきた生徒にとっては、学校とは拘束であり、授業は苦痛でしかない。その反面で、休み時間のたびに職員室を訪れては、世間話をしていく生徒たちである。そうした心の動きを探りつつ、その後も教室空間を自由に動き回

ろうとする生徒と遣り合いながらの毎日の授業である。

国語という授業にあたっては、できるだけオーソドックスな教材を選ぶようにしている。読んだり書いたりすることが不得手で、国語は面倒だという生徒が多い。であればこそ、できるだけ重厚な日本語と格闘してほしいと思っている。授業でも、最初は抵抗感ばかりが先行するが、理解や興味の範囲が広がっていくに従って、その分各人の達成感も大きい。夏目漱石「現代日本の開化」などは、収穫の多かった教材の一つである。

また、学期ごとに短歌や俳句創作の時間を設けるようにしている。真っ直ぐに自己表現をする機会の少ない彼らに、堂々と自由に自分の何事かをさらけ出してもらいたい。そうした思いから、教室という枠を外して野外に連れ出し、自然の中で好きなように創作させる。伸び伸びしすぎて果たして創作しているのか疑わしい者もいるが、合評会ではお互いの個性がそれぞれに見えて楽しく、新鮮である。

何も出来ないのではなく、何か出来る。そうした小さな自信を積み重ねていくことの意味を、私自身が、この一年を通じてひしひしと感じているところである。

榎本隆司先生と国語教育学会

横堀利明

記録によれば早稲田大学国語教育学会、第一回例会は昭和三十八年十一月に行われている。以来、榎本隆司先生は、本会設立の中心的な存在であった川副国基先生の近くにあって、早くに会の実質的な運営に携わってこられた。昭和五十七年度からは、代表委員（前年度までは会長）を八年務められるなど、学会の中心的な存在として会の発展のために活躍してこられた。ご活躍は運営面ばかりでなく第一七二回大会時（平成四年六月）には「教育改革と国語教育」、第一九八回例会時（平成十年十二月）には『対話』ということ」という演題で二回の御発表をされている。また榎本先生と学会のつながりを象徴的に示しているのが例、大会の看板書きのお仕事である。二百回にならんとするこの会のほとんどすべての看板は先生の手によって書かれてきた。

本会の特色は中学、高校の教育現場に立つ教師と大学の研究者が集まって、新しい国語教育を創造していくという点にある。学会創設当初から川副先生が大切にされた基本的な会の理念として、榎本先生は折りに触れ、我々後進に話をしてくださった。そして自らのその言葉を実践され、校務多忙の中、例、大会には必ず出席をして、現場で働くわれわれの指導をしてくださった。

本学会がスタートした当初は年間に7、8回ほどの割合で例会

が開催され、活発な研究活動がなされていた。しかし、昭和五十五年（奇しくも私の入学したのは五十五年である）頃から例会は年に4回ほどに減少していった。こうした状況に何とはなしに物足りなさを感じていた若い教員が主体となって自主的な勉強会を結成する運びとなった。その折り、相談にのって研究室を提供してくださったのが榎本先生である。先生は同じ勉強をする仲間の一人として会に関わりたいということでこの勉強会（早稲田大学国語教育研究会）に参加してくださった。昭和六十二年に伊豆の大島から戻ってきたばかりの私は高野光男先生と一緒に新入会員として参加した。書籍が山積みされた狭い？研究会で韻文指導について語り合った春の宵が思い出される。

平成元年には、国語教育学会の活性化を目的として研究会を設置することとなり、その準備会が数度開かれた。この時に新設された研究会は現在に至るまで続いている「国語教育史と実践に学ぶ会」と「古典教育研究会」の二つであるが、その原型は前述した早稲田大学国語教育研究会だったのである。この会を一つのモデルとして、運営スタイル、企画内容等が準備会で検討され、研究会が産声を上げたのである。私はこの「実践に学ぶ会」に現在も参加させていただいているが、私の教員としての基礎はここで培われたといっても過言ではない。研究会のメンバーの多くが例会の発表をしたり、「早稲田大学国語教育研究」に投稿する現状を見るにつけ、研究会活動が学会の活性化に大きな役割を果たしていることは記憶されるべきことと自負している。榎本先生には「実践に学ぶ会」の方にもたびたび足を運んでいただいたし、研究会の活動については常に関心を寄せていただいていた（研究会活動が現在のように活況を呈するに至ったについては平成四年から会にご参加いただいた大平浩哉先生のお力が大変大きいことも付け加えさせていただく）。早いもので研究会が発足して十年がたち、「実践に学ぶ会」も平成十一年三月で七十四回を迎える。

最後に榎本先生と私の個人的なエピソードを紹介してこの稿を終えたいと思う。私が現任校に異動して二年目のことである。昼休みに自宅の母から私に電話がかかってきた。何やら妙に緊張した様子であり、慌てているようでもあった。母が職場に電話をしてくるからにはよほどの火急の事態であろうと話を聞いてみると、榎本先生から葉書が来たのだという。「達筆でよく読めないけれど」といいながら、母はたどたどしく葉書を読んでくれた。先生はこの数日後に私がはじめて行う例会発表（平成元年九月）に際して、落ち着いて話をするようにという注意をわざわざ書き送ってくださったのだ。今回この原稿を書くにあたって十年前のレジュメを引っ張り出して見たが、なるほど先生が心配するのも無理はないと恥ずかしくなるような代物であった。駆け出しの教員のつたない実践一本だけの例会であったが、多くの先輩方にも参加をしていただき、アドバイスも頂戴した。

「俳句の世界へのアプローチ――主体的な読みを目指して――都立北園高等学校　横堀利明氏」と先生に書いていただいた看板は今なお私の大切な宝である。

（都立北園高等学校）